令和４年度　第５回地域福祉推進会議　会議録

【日　時】令和５年３月１３日（月）午後１時３０分～午後３時２５分
【会　場】磐田市豊田支所　大会議室
【出席者】13 名
【欠席者】２名
【事務局】13 名

1　あいさつ

2　議事

(1) 第４次磐田市地域福祉計画・地域福祉活動計画最終案について

配付された資料に基づき、事務局から説明。その後意見交換がされた。発言の概要は以下のとおり。

【パブリックコメントについて】

委　員　　子育てや障害について、パブリックコメントを読むと要望だけが出てきている。当事者・主体としても何を求めているのか。磐田市のしくみや制度など、もう少し視野を広くして情報をとっていただきたいと思う。

委員長　　情報を得るためにどこにアクセスしたらいいのか。まずはマッチングするというのが、今後の課題ではないか。

委　員　　地域づくりについての感想であるが、自治会組織は本来は住民にとっての住みよい地域づくりを進めることが基本である。自治会は何をすべきか、老人クラブは何をすべきか、あらためて説明が必要である。

委　員　　自立と自己責任が言われてきたが、今はいろんな組織・コミュニティがある。一方で役員の担い手が少ないことが課題。地域コミュニティを盛んにするには、一人ひとりが自立するだけでなく、共生と同時に情報に合わせて調整することが必要である。情報伝達、声を挙げられるようなコミュニティづくりが大切であり、話し合いができる関係づくりも必要である。障がいを持って暮らす人の周りの人たちの意識の変容も必要である。

委員長　　東日本大震災の新聞記事を読むと、震災後どのように生きてきたか、どのように地域づくりすればよいか、地域コミュニティをどう再構築するか、震災前までどう生きてきたかを振り返ることが大切である。自治会、民生委員など、仕組みを作ってきた方々がいるが、公助がこの仕組みに寄り掛かってしまっていないか、丸投げをしていないか。公助と互助との信頼関係づくりが必要である。声を声としてつなげていくために、次世代の方たちにどのように伝えていくか、想像力を膨らめて取り掛からないといけない。そのために、小中学生、高校生に地域に関心を持ってもらう仕組みが大切である。スクールコーディネーターが磐田では全校に配置された。学校と地域を密接につないでくれる。福祉教育という新たな領域を作ってくれたらさらに進む。

【本編について】

委員長　　用語集で引用したものがあったら、出典を記載するように。

【人づくり】

委員長　　市社協の講座に協力した。参加者に男性が多いことに驚いた。女性が主役になりがちだが、磐田の特性かもしれない。大いに歓迎できること。

事務局　　地域の役員の代表に声掛けをしたのが要因かもしれない。

委　員　　人づくり、コミュニケーションが大事。男性も社会参加して、ひきこもっているような方への声かけも強化していきたい。

委　員　　地元で行うボランティア講座に中学生が参加した。学校にお願いした時には、生徒が地域活動に参加することはいいことだという話だった。自治会単位での呼びかけは難しいが、今後も継続していきたい。また、富岡地区にはサポータークラブがある。草刈りや神社の清掃など無償の活動である。百歳体操や親睦を図る活動もある。

委員長　　素晴らし企画をされている。手間暇がかかる活動であるが、今まで継続できた理由は。

委　員　　地域性ではないか。やってみようという気持ちで続いている。

委員長　　続けることは大きなエネルギーがいる。社協との接点はあるか。

委　員　　市民活動センターと自治会との関わりが大きい。

委　員　　学校に関するとことは、中学３年生を対象に学校教育課が行っている。1・2年生を対象とした活動は加茂地区には独自で青少年健全育成の活動として世話をしてくれる人がいる。基礎にあったのは自治会活動である。地域そのものが昔から人間関係を築いている積み重ねではないか。

委員長　　人、地域、歴史。いろいろなものが積み重なってできている。

委　員　　福田の５つの地域づくり協議会も様々である。それぞれの地域の積み重ねを活かした取り組みをしていかないといけない。

高田委員　　田原地区で何かをお願いする場合、元々住んでいる方と、新しく来た人でうまく行かないこともある。タスクチームを作って課題に対応している。福祉委員による救急医療情報キット活用による見守り活動をはじめ、人と人とのコミュニケーションが基本となっている。子育て支援や生活応援クラブ等で対応することを提案している。会議メンバーの幅を広げて、女性や若者に入っていただきたいと考えている。

【地域づくりについて】

委　員　　磐田市はいろいろ取り組んでいる。資源はあるので見せ方に力を入れていけばいいのではないか。核となる人材の育成として一歩を踏み出すことが大事。発達障害の人数が多くなってきている。特別支援学校で対応できる人とともに、ぎりぎりのラインの人が多くなっている。地域に暮らすという視点で、健常の人も障害のある人もごちゃまぜで暮せる地域を目指している。参加しやすい工夫だけでなく、普及啓発が必要である。

委員長　　コロナで出かけにくい状況が続いた。もう一度当事者の方々への関心を持って

いただく働きかけが必要である。

委　員　　コミュニティでの祭りが復活してきている。地域の人間関係づくりにつながる明るい材料である。

委員長　　お祭りの復活は、世代がつながっていく大きなきっかけ。

委　員　　田原地区の今までの話し合いの仕方を変えていく視点は素晴らしい。磐田市は対話によるまちづくりを進めている。新たなやり方、仕掛けをつくっていくことがベースではないか。女性や若者の参加、小さな対話の場面や学び合う場が大切である。

委員長　　市民の中からコーディネーターが出ることが住みやすい地域になることにつながるのでは。

委　員　　障がいを持った方の支援をしてきた。周りではどんな活動が行われているのだろうか考えている。中学生のボランティアなどを体験した人がその後の成長につながってくる。いろいろな人が身の回りにいる。そのような方々も社会に出てきてスムーズにコミュニケーションができるといい。障がいを持つ方のことも少し考えて優しい世界になると良い。

委員長　　国連の国際障害者の権利条約のシンポジウムがあった。最初に成年後見ありきではないというＷＨＯの話があった。制度は点と線でしかない。共生の場として、まず地域でどう生きるかということである。想像力が必要である。

【支援体制づくりについて】

委　員　　介護保険施設数カ所を運営している。頼ってもらえる施設になるといい。包括をはじめ窓口が広がっているが、施設は入りにくいイメージがある。敷居を下げていくことで、困った時に相談できる場所があるということを伝えていきたい。様々な機関・団体とつながって、開かれた事業所にしていきたい。

委員長　　苦情解決委員をしているが、高齢者施設では家族と会わせてもらえなかったという苦情が多い。いつまで続くかという意見もある。

委　員　　福祉、医療の現場では閉鎖的になっている。クラスターの心配もあり、現実的に温度差がある。ただし、面会は入居者のパワーになっている。いろいろな方法を活用して面会をしてもらっている。地域とのギャップを感じている。

委　員　　静岡新聞の夕刊が廃止となる。見守り活動の協力で新しく構築しなければいけないが、現場のことで手一杯で対策ができていない。全ての夕刊がなくなるわけでないので、できるだけ見守り支援ができればと考えている。

委　員　　23 の地域づくり協議会がそれぞれの形で方向性を持って進めている。地元に密着した組織になった。防犯、防災、福祉と、部門を作って活動している。地区社協の関係も地域によって温度差があるが、地域福祉部会に入って活動している。地域の高齢化が進み、福祉部会の方は仕事が忙しい。福祉のウエイトが重くなっている。

委員長　　地域づくり協議会の福祉部等で仕組みづくりが実際に動いているというのはいいことである。大澤さんが活動する上でのポイントと感じていることは何か。

委　員　　地区によって異なる歴史があり、それをふまえた取り組みとなるようにするこ

とである。その中で福祉関係の活動が増えるので、福祉が前に出ていくような組織になればいいと思う。

委員長　　仕組みが動くこと、地域福祉の評価ポイントである。

【計画策定の評価について】

委員長　　今回の計画策定に関して、総合的な評価、出来栄え、総評はいかがか。

委　員　　前回の第 3 次計画策定に参加したが、今回ほど充実した会議はない。地区別の指針は価値がある。福祉の課題が浮き彫りにされている。それに対してどのように考えていけばいいか、委員が共有できたことが良かった。それぞれの立場で何ができるか考えるきっかけになったと思う。私も、子ども・次世代のことを何とかしたい。ヒントがいっぱいある。他地区のことも分かる。成功例も失敗例も共有して。自分も含めて実践していきたい。

委員長　　課題を浮き彫りにして一歩踏み込んでいく。地域の歴史も考え方も違う。それが地域である。地域と地域がお互いに知り合うことができる。指針が大いに役立つと思う。

委　員　　素晴らしい計画ができた。これを実現していきたい。感じていることは地域崩壊で、その防止に役立ててほしい。期待している。

委員長　　少子高齢化だけが原因ではないが、計画を通して理解をしていくことが大事ではないかと思われる。

委　員　　冊子を見て、自分たちの方向性を見いだすことができた。できることをひとつずつ、タスクとして拾い上げ、みんなで会話しながら取り組んでいきたい。

委　員　　地区別の指針は立派である。ＰＤＣＡを回して実りあるものにしていくために、成果等について見える化するための取り組みは。

事務局　　市：来年度以降、年１回程度の会議を予定している。その中で指標等に対する評価をしていく。

社協：毎年行う事務事業評価に結びつけて評価していく。

委員長　　５回にわたる話し合いの成果がまとまった。学会では地域福祉に関する評価のシステムは確立していない。見えないものを見える化することに難しさがある。評価システム、ソフトを作りたい。早々に実現していきたい。

２年前に県社協から頼まれて中学生と地域住民が使える福祉教育の副読本を作成するよう言われた。間もなく完成する。地域福祉活動は楽しくなければ続かない。ありがとうと言われてうれしい。そうした多くの方の顔を浮かべながら、事務局は苦労して作ったと思う。是非活用して、「官・民・協（協働）」、ともに声掛けをしてほしい。

３　その他

事務局から事務連絡

・計画について、最終チェックをして製本に入る。

・計画の推進について、来年度は進捗管理として年 1 回の会議を予定する。日程については、後日早めにご案内する。